

Act Like a Baby

Tokyo Neko-jin

001 The Collection
of
Poems

— Tokyo Neko-jin Blueberry —

「ご趣味はなんですか？」

「病気を探る事ですかね」

「それはそれは病的なご趣味をお持ちで」

彼は医者を辞めてしまった。

木造住宅が立ち並ぶ袋小路で子供らがかくれんぼしている。

駆け抜ける二人の男の子と目が合ったので、挨拶をした。

「こんばんわ」
「「こんにちは(・∀・)ノ」」

「.....(・ω・)」

私はもう、君達とは違う時間を生きているのだね。

有限な存在である僕等に、永遠の存在を否定する力はない。

なのに禿頭の詩人は儚いものを指差して、

「ほら、永遠なんてないんだよ。私の言った通りだ」

とドヤ顔。

あなたが笑顔が在った事実は永遠に消えないというのに。

普段は見えない道を走る《5月の少女》が行き着く先は、
私達大人が介入できる場所ではない。

けれども、

昔は私達もこの《5月の少女》のような幼子だった訳ですから、
この道が へと通ずる事を心が覚えています。

なに？ 文字が見えない？

残念ですけど、忘れてしまったら、それまでです。

湯呑みを覗きこんだら、

「み、見ないでっ！」

と僕の視界を曇らせた。

ったく、可愛い奴だ。

《生き甲斐》が、降ってくる降ってくる。

掴めよ若者。

地に落ちてしまったものは、《死に骸》。

踏まぬように気を付けなさい。

それは敗者の甲羅。

あなたのものに、なるかもしれないのだから。

沈黙を言葉で表現したいと禿頭の詩人は言った。

「簡単さ。黙っていればいいのだよ」

僕は彼にそう言っておいた。

沈黙も言語表現である。

あまり褒められたものではないかもしれないが。

「楽園ってどんなところなんだろう」

と彼女が微笑みながら空想するその瞬間、
僕が「今だよ」と言ってあげても彼女は納得しないだろう。

自分の顔は見えないのだから。

「今だね」と彼女は言う。

「えっ。今なの？」と僕は驚く。

彼女は笑って、「君には見えないのよ」を言う。

僕も笑って、彼女が入れてくれた熱いお茶を飲もうとすると、眼鏡が曇った。

まったく、可愛い奴だ。

「最初はグー」

「なぜ？」

「えっ」

「えっ」

「桁違いだ」

「桁しか違わないという事は、努力すればいずれ追いつけるという事ではないか。単位が異なっている訳ではないのだから、悲観する事はない」

「.....」

彼に友達がない理由が少し解った気がした。

蒸し暑い夏の夜、くたびれたリクルートスーツを着た娘が東京から帰宅。

冷蔵庫の中を物色しながら、

「あたし、人生間違えたわー」

と呟いた。

親としては、娘のこんな台詞は聞きたくなかったが、「何処で間違えたというんだ？」と尋ねてみた。

すると、

「何処って……、何処でも良かったのよ」

「何処でもよかった？」

若い殺人者の動機みたいだな。

「何処かで道を誤ったんだろ？」

「違うわ。何処かで人生を選択しておくべきだったって意味で言ったのよ」

人生なんて振り返ってみれば一本道だが、そこを前を向いて歩いていた時は、無数の進路がこっちへおいでと手招きしていたように思えた。

それなのに、何も選択することなくスーツを着る年齢になってしまったお前に、私は父親としてなんて声を掛けるべきなのだろう。

小五ん時、スイミング辞めるように言ってごめんな。

親以外の大人と話す機会与える事できなくてごめんな。

中二ん時、塾なんかに行かせてごめんな。

高三の進路相談ん時、東京の大学行かせてあげられなくてごめんな。

門限なんて約束破ったっていいのに、お前は優しいから頑なに守って、お前を縛り付けてごめんな。

何もなかった事を褒めてあげられなくてごめんな。

部屋ん中で煙草吸ってごめんな。

いつだったか、お前の彼氏ひっぱたいてごめんな。

窓を開けると夏祭りの太鼓の音が微かに聞こえる。

テレビを消して、耳を澄ませた。

その音は、ゆれる提灯下で繋ぎ損ねた手を握り締めながら私を責める幼いおまえの視線のようで、私にはとても苦しく思えた。

「ポエムなんて絶対黒歴史になる」

そう思いながらも、東京猫耳氏は書いてしまったようです。
そして公開して、あなたの目に触れて、東京猫耳氏は若干後悔しています。
笑うなら笑ってください……。 「w」とコメントをください（笑）

東京猫耳氏は「詩を書くつもりで始めたので」ということで『東京猫耳詩集』と名付けましたが、「実際書いてみるとポエムといえるのか、きわどいもんばかりだなあ」とも言っておられました。
ですので、パブーに本をアップする際に必須である「カテゴリー」に東京猫耳氏は悩んでいました。

しかし、思うのです。

これが散文詩であろうと、短篇であろうと、ショートショートであろうと、詞であろうと、それはパッケージに過ぎなくて、作品の良さは損なわれないのです（無論レベルの低さを補ってくれる訳でもないのです）。

ですから、どうしても解釈できる便利な言葉、「純文学」にカテゴリズさせていただきました。

それからもうひとつ。

「任意のページにハイパーリンクを付けてくれさえすれば、この本の言葉、ガンガン引用していいよ」

と東京猫耳氏は言っています。

引用するような精度の高い言葉はありませんが（笑）、「実験的に自分の作品と繋げてみてもいいよ☆」って方がいらっしやったら、どうぞ、やってみてください。

パブーにはもっと楽しい可能性が潜んでいると思うのです。

以上です。読んでくれてありがとう。